

〔会長講演〕

## 文明圏と破碎帯

黒崎千晴

はじめに

- I. 文化圏・文明圏について
  - II. 段階的移行と中心地域の移動
  - III. フロンティア理論と破碎帯
  - IV. 破碎帯の形成要因
- むすびにかえて

はじめに

社会・文化地理学の各分野でも、近時、過去へ遡及して事象の発生・展開から解消ないし化石化にいたる過程を解明することの重要性が強調されつつある。これは対象自体が時空間的性格を有するがゆえであって、歴史的諸営力の相互作用の追求なくしては、今日の様相の解明も至難と認めるからとしてよい。つまり、ある意味では、過去の地理に関する究明は、歴史地理学だけの独占とは容認されなくなりつつあるかともみられよう。

しかし、歴史地理学の主要課題の一つは、過去の地理を復原することだけに限定されるわけではあるまい。それを手掛かりとして、地域変容の要因および過程を究明することにより、さらに将来への展望にも資することにある。その場合、まずは現今の様相把握を基点に、可能な限りは過去へ遡及する手法も容認されよう。

文明の誕生と展開および解消・化石化は、まさに最大規模の地域変容であって、それに要する時間は少なくとも数百年ないし一千年以上とみられる。しかも文明・文化の地表空間的展開の動向は、文明圏・文化圏として解明できるものとされている。つまり、この種の課題までが、

歴史地理学の研究対象に含まれるとしてよい。

従来的一般的見解の中には、新生の文明は既存の別文明の遺産の上に築かれて来たとするものが多く、そのためか文明移転と称する説さえある。たしかに文明要素の伝播・受容は広く認められるものの、旧文明の核心地域において、新文明の萌芽誕生という史実などはまったく認め難い。多くの場合、ある特定文明の辺境の地か、もしくは複数文明が接触交錯する漸移帯すなわち過去における破碎帯の性格の場合こそ、新文明誕生の地と目される。それも在来文明の核心部との間に展開した人・もの・情報等の交流頻度の如何こそ、辺縁の中の特定の場を新文明発祥の地とする要因とみられる。のみならず、この新文明が最も順調に展開し発展の頂点を示す場は、その発祥の地とは限らず、新文明誕生以前にあっては、その誕生の地よりもさらに辺境的色彩の濃厚な地へ波及し、より多面的な変革を進めた結果とみることさえ可能である。したがって、われわれの主要対象とする地域変容解明のためには、この種の事象に関する追究こそ要請されるわけである。

文明圏、破碎帯などあまりにも巨大な対象であって、みずからを省みて到底その任に耐え得ないと自覚するが、研究対象の範囲をより大規模に拡大し、何よりもまず全体像を把握することが、われわれの研究水準向上への一里塚と考え、少なくとも話題提供を、との微意からでもある。

### I. 文化圏・文明圏について

もろもろの文化的事象を指標として、地表空

間を文化圏ないし文化領域として区分，それぞれの構造や変動を究明しようとすることは，文化地理学の主要課題と認められ，これまでも少なからぬ研究業績の蓄積がある。ただし文明・文明圏を主題とする地理学的研究は，管見する限り，まず皆無かとみられる。

ともあれ，文化的事象を解明しようと意図する場合，文化とは何か，文明とは，さらには文化と文明との関連如何など，対象そのものの性格把握やその概念規定こそ，作業仮説としても，まず当初の前提として究明を要することは当然のことである。この面からの追究が不備な場合は，構造・変動その他の追究の結果ばかりか，圏域設定そのものもいささか皮相的にすぎないものになってしまう。また隣接諸学の側からも，論外ではあるまいかとまで無視される可能性も大きい。この分野に関する地理的研究と称するものの中には，従来，このような基本概念が不足がちなためか，内部からも不備・欠陥を鋭く批判し，根本的改革を要するのではあるまいかとの発言もある。

ところで無文字民族を研究の主要対象とする文化人類学の分野では，文化に関する概念規定がその研究の前提条件とされているが，「文化とは，ある特定社会の構成員によって習得，共有，伝達される行動様式ないし生活様式のシステム(体系)である。」というような包括的概念が主流を占めているとは認められない。文化をシステムとする点ではいずれも共通するものの，大別するだけでも，(1)自然環境への適応体系，(2)観念体系，(3)象徴体系，等々<sup>1)</sup>まことに多彩な定義付けが提言されたままで，まさに十人十色というのが現段階とみられる。

この分野の場合，地表空間との関連について，文化圏(Kulturkreis)<sup>2)</sup>および文化領域(culture area)<sup>3)</sup>という二つの観点が指摘できる。ただし前者の場合，ある種の人類文化史再構成を意図するような文化圏説崩壊以降，この分野での専門用語としては認められなくなってしまったという。だが文化地理学にあっては，文化圏ないし文化地域(ともに culture region)なる用

語は一般に用いられており，文化人類学の分野でのこれら用語に関する定義についても言及の要がある。

文化人類学では，「文化圏」とは，ある特定地域に特徴的な文化複合を意味し，しかもそれは過去に形成され，現今まで持続して来た安定性の高い性格を有するものとしている。これに対し「文化領域」とは，ある時点での文化の空間的区分で，特定地域の諸文化要素は，その時点における当該地域の特徴にすぎないとしている。したがって前者によると，同一文化圏が遠くはなれた別個の大陸にも存在し得るとする考え方が論理的には設定可能となり，いささか仮説的概念だともいう。一方，後者すなわち文化領域は，もともと静態的な記述・分類の試みであったが，必ず地域に直結した現実的な区分設定であるとされている。

なお，文化領域設定にあたっては生態学的・歴史的両条件を用いるのが一般的で，そのうえ当該領域内で指標要素が最も濃く集中的に分布する範囲を「文化中心」，その要素分布が薄くかつ他領域の要素の混入傾向もみられる部分を「文化周辺」とするなど，地理学類似の見解さえ提唱され，空間的な中心・周辺関係への観点も著しい。ただしこれまでのところ，全世界にわたる文化領域区分設定はなお未完成とみられ，無文字民族以外の諸民族に関する追究は乏しいというほかない。

比較文明学<sup>4)</sup>ないし文明論などの分野においては，精神文化と物質文明という二元論の見解や，文明とは都市を有する文化であるとするなどの通俗的な概念は，ともに論外とされている。しかし文明移転こそ人類史・世界史であるとの提言がある一方，文明なるものは相互に異質的な独自性を有し，各々の基本原理の伝播は不可能とする見解が有力であるなど，これもまたいささか多様というほかない。ただ，社会と文化との統合体こそ文明であるという点だけが，一般に共通する概念かと認められる。

とはいうものの，固有の文化を保有しない社会共同体なるものは，果たして存在するのであ

ろうかとの疑問が残ることも否定できない。再言するならば、われわれの究明能力の限界のために、社会と文化とに区分して追究するほかないから、このように両者の統合体などと規定せざるを得ないのではなからうか。

以上に概観したような様相からすると、文化や文明に関する基本的概念の定義そのものさえも、人文系・社会系諸学を通じて、なお百花文放の状況を呈していることは否定できない。つまり、文化や文明もしくは民族や宗教などと称するものはいずれも、分析と抽象本位でしかも合理性究明一辺倒とってよい近代科学路線（要素還元主義、機械論的決定論、ロゴス中心主義等々を基礎とする枠組みからの）とは、本質的になじみにくい性格を有する概念なるがゆえではあるまいか。

そのためあって、システム（体系）とか複合としてみるべきだとの見解が提言されるようになったとみられるのであるが、このような性格を有する諸概念を如何に取扱うべきかとの視座も手法さえも、なお開発途上にあるというわけであろう。

だがしかし、なお厳密な概念規定ができてはいないとしても、自己が帰属を意識する文化・文明とは異なる別個の文化・文明に直面した場合、それこそ直観的に違和感を自覚し、相互の差異が把握されるのも通常としてよい。一時、その新奇なものに心酔し、それへの同化に専念しても、いわゆる鳥なき里のコウモリ的（marginal men）<sup>9)</sup> 状況からの逸脱は至難事という。まして社会共同体としての同化、つまり自己の文化・文明を解体して別個のそれへの同化ないし被吸収には、きわめて長年月を要するとみられる。

したがって各々の文化・文明には、それを保有する社会共同体ごとに特有の個性が認められることは否定できない。また、この種の社会共同体が単元となって、それぞれに地表空間的な圏域を形成して来たことも明白としてよい。というのは、いずれの社会共同体も各々特定の地表空間を占有しない限りは、存在さえおぼつか

ないことも自明と認められるからである。

文化地理学の場合、当該地域ではその文化の主要な諸特性の構成・配列および統合状態に基本的なまとまりがあると把握され、その結果、他地域から文化的に区別できる広い地域こそ文化圏・文化地域<sup>9)</sup> であるとの見解を、一般に最大公約数的としてよい。なお、文化圏設定の主要指標としては民族、宗教、言語などを採用し、経済類型、居住形態、人口変動パターン等をも考慮する必要があることなども共通的としてよい。つまり、先に言及した文化人類学分野での文化領域のそれとほぼ共通する視点・手法とみることが許容されよう。

しかしながら地理学部門からの内部的批判のなかにも、地球規模の文化圏設定は至難事だから、一部の文化要素だけに限定した分布範囲の把握にとどめるほかあるまい。ある特定の文化の場合、最も妥当と認め得る文化特性・文化複合であっても、他の文化にはそれが妥当するとは限らないことが少なくないとして、これこそ文化圏画定に対する本質的障害である。あるいは各々の文化圏の核心部に関する限りは相対的に明白と認められるものの、圏域の辺縁ほど文化特性までも不分明というほかない、等々の批判続出という状況は否定できない。

この種の批判への対応からか、各文化圏の接触部分を漸移帯・交界地帯として、概略的境界部分を線状とせず帯状に図示するだけにとどめた考察もある。ただし、図化という制約のためか、残念ながら今日にいたっても、文化圏の変動に関する追究を含めた動態的考察は、まことに乏しいとしなければなるまい。

ところで、比較文明学・文明論等の分野であっても、文明圏なる用語が散見され、文明と地表空間との関係如何に言及する論考も例外ではない。諸文明のありようを大陸規模で考察した生態史観<sup>7)</sup> はその代表的事例と認められ、社会であるからにはそれが存立する土地を必要とするとか、文明とは相当に広い空間を長期にわたって占有する人間集団をいう、などの見解は、ともにこの種の好事例としてよい。ただし地球

規模で各々の文明圏<sup>9)</sup>を図示した考察などは、きわめて例外的というほかない。

つまりこの分野にあっても、文明ないし文明圏の核心に関する解明こそ先決課題とされており、その圏域や圏域の辺縁に関する究明までには及んでいないとしてよからう。しかしながら、文明の構造と変動、大文明と周辺文明との関係等の考察を進めるには、諸文明相互の時空的関係や、文明圏内での中心・周辺問題などの究明こそ不可欠なのではあるまいか。しかも比較文明学からの提言のなかには、新文明は旧来の文明中心からは生まれず、必ずその周辺から出てくるとの見解<sup>9)</sup>さえあるほどで、まさに地表空間的追究こそ期待されると認めざるを得ない。

とはいうものの、地域変容の要因および過程究明への示唆を求めるためには、異文明間の関連如何などという大規模空間に関する見解に限定されるだけでなく、段階的移行と中心地域移動の並行関係のような、より小規模空間に関する諸見解をも視野に含めることが、当然のこととして要請されよう。

## II. 段階的移行と中心地域の移動

研究対象の解明にあたり、空間的な中心・周辺ないし辺境との関連如何を追究する視座は、人文・社会系諸学の各部門でもようやく根をおろしつつあるかとみられる。これは空間関係を軽視しがちな従前からの視点、時間的系列だけに重点をおく視座などによる追究だけでは、事象解明もまことに皮相的かつ偏向にすぎるとの反省からか、あるいは細微に分画された一分野的視点からだけではなく、学際的な総合的究明こそ、という最近の動向を反映したものかともみられよう。さらには、解明すべき対象はいずれも、時間と空間の両軸からの交点を占め、まさに時空連続的性格をその本質とするがゆえに、中心・周辺・辺境なる地表空間的視座こそ不可欠、ということになって来たとしても差し支えなからう。

近代以降、世界指導国は100～120年を周期として交代して来たとする長波理論<sup>10)</sup>（J. モデ

ルスキー）の場合、それが指摘する歴史的にみた世界指導国の交代なるものは、まさに中心地域の移動以外の何者でもない。

世界の銑鉄総生産量に対する特定の国々の銑鉄生産量が占める比率を、一国ごとにその年次的変動を算出、その結果をもとに主要工業国の国際的地位の交代時点と戦争勃発との関連を究明する歴史工学的見解<sup>11)</sup>（馬野周二）は、地表空間的視座からすれば、これまた中心地域の移動と認めざるを得ない。

ただし今日までのところ、このような中心移動とか、それと並行して展開する地域変容などについて、それぞれの要因や過程に関する究明までにはいたっていないとするほかに、ことに地表空間的視座からの時空連続的な言及などはまことに乏しい。

生産様式ないし経済体制などのいわゆる段階的移行に関しては、特定の一地域をその内部だけに限定して、経済発展の普遍史的シェーマの妥当性を実証的に検討することは見当ちがいと批判し、単に一地域だけについてみると、段階的飛越しは歴史上たえず見出されるとの主張がある。この種の段階的移行の要因・過程についての言明にはなお批判を要するとしても、段階的移行と中心地域の移動とが並行的に展開し、旧段階の中心地域が移行後の新段階では後進的に停滞してしまうとの指摘<sup>12)</sup>こそ評価にあたいする。なお、生産様式の段階的移行が中心地域の移動を不可欠とするという最も単純化した主張は「周辺革命の法則」<sup>13)</sup>であろう。ただしこの法則の場合、新様式の萌芽がいち早く旧段階の中心で誕生するか否かに関しては、まったく言及していない。

社会の発展過程ないし社会体制変革についても、西欧封建制の成立について、それをきわめて異なる発展段階にあった複数の社会を暴力的に融合させ、各社会の枠組みを破壊した後生まれた新体制と認める<sup>14)</sup>とか、さらに一般化して、それは同一社会で進展するのではなく、その周辺ないし辺境において新原動力が定礎し、そこが起点となって旧体制を動揺・変化させた

結果が社会の発展過程だとする「辺境変革論」<sup>5)</sup>もある。これらもまた、中心移動と段階的移行とが並行的に展開するという見解としてよい。相互に異質な複数社会を暴力的に融合させそれぞれの枠組みを破壊した後生まれたとその要因を指摘、あるいは周辺・辺境からの動向が旧来の中心を動揺・変化させるとする過程への追究など、いずれもきわめて注目すべきものと認めざるを得ない。

地表空間に展開する諸文化については、根強い伝統、整備された制度、強力な既得権益集団等を有する文化の中心地域よりも、それらが乏しい周辺や辺境の側こそ新動向を受け入れやすく、それを一層完全に発展させるとの見解がある。あるいは先進形態は通常次の先進段階を生み出さない、次の段階はそれとは異なる系統から始まり、かような継起段階は同一地域では認められないという主張（進歩の系統発生的・地域的不連続の原理）もみられる。ともに、ある特定の文化中心地域から、なぜ新動向の誕生・展開が認められないのかを究明しようとの見解ということになる。

文明・文明圏については、特定のある文明圏周縁の未開のどこかでフロンティアが発生、そこに次の文明爆発がおこり、前の文明をも征服し、それと並行的にその外部にも文明のおよぶ圏域を拡大して来たのが歴史過程だとする「フロンティア理論」<sup>6)</sup>が注目される。この提言では、たとえ未開でも文明との間において人・もの・情報などの密接な交流が展開される場合、未開の側はその文明の特定要素だけを採用・利用する結果、フロンティアが発生するとしている。なお、地表空間が複数文明で飽和に達してからは、新しい文明爆発は異文明間のフロンティア勢力として出現、文明密度増大の方向に展開して来たと見ている。さらには文明圏展開の場としての地表空間について、文明圏と大生態系との関連を重視し、それを前提とする見解と認め得る。

これまでに列挙した諸見解・提言はいずれも、段階的移行と中心地域の移動との並行関係を是

認する点が共通すると把握される。しかも段階的移行の進展とともに、旧段階の中心地域は停滞的な後進地域となってしまう、新段階の中心地域からすれば周辺ないし辺境的性格の著しい地域になると認める点でも共通的としてよい。

このような様相はまさに最も大規模な地域変容であって、この種の広範な変容は、場合によっては数百年以上をも要する過程と認めざるを得ない。それゆえにこそ、その変容に関する要因および過程についての究明が期待されるわけである。

われわれの視座からすると、いずれも中心・周辺ないし辺境という空間的区分が採用されてはいるものの、この種の区分を如何なる規準・指標によって設定するかについては、いずれもがまったく言及していないことこそ指摘せざるを得ない。そのようなことはまさに自明なるがゆえに、明示の必要もあるまいというわけなのであろうか。

したがってこれらの区分は、三者ともに単一の統合的な地表空間に含まれるとするのか、それとも中心と周辺はこの種の統合的空間に属するが、辺境までにはその統合化が及んでいないとみるのか、あるいは三者ともそれぞれ異質な空間と認めるのか否か、等々まったく不分明というほかない。それゆえ段階的移行進展の場合も、それが旧来の統合空間内部だけに限定されるのであるか、あるいは移行とともに空間規模や範囲に変動が認められるか否かについても、言及されることはまことに乏しい。

唯一の例外は、未開のどこかにフロンティアが発生するとするフロンティア理論だけかと認められる。つまり文明圏の辺境(未開)と核心部とは質的に異なると区分し、新文明は旧文明圏およびより広範な空間までもその領域に含めるとして、空間規模の変化にも言及している。さらに諸文明圏により地表空間が飽和してからは、複数の文明圏が接触・交錯する空間こそフロンティア爆発の場であるとするなど、空間的側面への関心も著しい。とはいうものの、われわれの視座からの期待には、なお程遠いとしなければ

ばなるまい。

まったく図式的にみる場合、中心・周辺・辺境という空間関係は、まさに同心円の様相を呈するとみることが許容されよう。その同心円の中のある特定空間にだけ核心が移動、段階移行が進展するのに対し、同一の同心円に属するにもかかわらず、その他の周辺ないし辺境にあっては新様式の誕生が認め難い理由は何か、周辺はともかく辺境の場合、別個の中心に対しても同じく辺境的性格が認められるのか否かなどの疑問の究明は、なお今後に残された課題とすべきものであろうか。

その視野に中心・周辺ないし辺境と空間関係を包含する傾向が著しい諸提言も、これまでに展望した限りでは、上述のようになお疑問続出ともいうべき様相は否定できない。しかしながらこの種の各見解の中にも、地域変容解明について、少なからぬ示唆を提供すると認め得る提言が皆無というわけではない。

たとえば段階移行に際して、旧来の中心ではあまりにも強固に伝統・制度の保持に努め、しかも既得権益集団が優勢すぎるのに反し、それがまったくない辺境や旧様式の浸透が乏しい周辺こそ新様式が順調に進展するとする見解など、中心・周辺・辺境それぞれの異なる性格を指摘するものとして肯定できる。ことに文明および文明圏に関するフロンティア理論のごときは、地域変容解明にあたっての基本的観点までも示唆するものとして評価されよう。

### Ⅲ. フロンティア理論と破碎帯

フロンティア理論の要点を整理・検討して、われわれの視座からの所見をも付言するならば、おおむね次に示すごとくになるろう。すなわちまず、

A. 新様式・新文明は、一般に旧来の核心からではなく辺境において誕生する傾向が著しい。しかもその誕生の必須条件の一つは、核心と辺境のある特定地域との間に展開されて来た域間交流の頻度の高さにある。

つまりこの両者間に展開する高頻度の域間交

流、それによる文化・文明要素の選択的な伝播・受容こそ、辺境におけるフロンティア発生の主要条件としてよい。だが、諸要素の受容にいたるまでには、さまざまな文化変容<sup>17)</sup>もしくは文化的共鳴<sup>18)</sup>を不可欠とするはずである。その結果、受容した要素それ自体も、核心でのそれとは異なった特性を具備するようになる。

すなわち辺境の固有・伝統的要素と受容した新要素との統合化・一体化の過程こそ、フロンティアの発生もしくは新文明爆発という結果を生み、当然ながら過去の辺境のうちのある特定地域が新中心へと変貌することになって来る。したがって、辺境だからといって、どの地域でもフロンティアが発生するわけではない。

域間交流の頻度如何という問題の追究は、もろもろの資料的制約による障害が予測されるものの、交流・伝達のために利用して来た交通路線、輸送・通信の用具・機関やそれらの技術的水準等々の検証を必要とする。ことに陸運・水運のいずれが主力であるかにより、域間交流のありよう自体が大きく異なることに留意すべきであろう。

B. 段階的移行展開と並行的に誕生した新中心は、旧中心およびその勢力圏をも併合、さらにより一層広範な領域をもその圏域に包含してしまう。

中心地域の移動は、段階的移行とともに進展するだけではない。新中心の勢力圏のひろがり、すなわち空間規模の変化もまた並行的に展開するわけである。この傾向は、新文明の爆発に伴う新文明圏形成にも共通すると認められる。このような圏域変化は一般に旧段階のそれよりも拡大化の傾向を示すとしてよいが、場合によっては旧来の圏域の一部を除外して、他の方向への拡大化を展開する事例も認められる。

この種の圏域拡大化は一般に、まず最初に侵略・征服などの軍事的行動が先行、それに伴い政治・行政的支配が展開、ついで経済分野での交流が具体化し、さらには人種的混血も進行するが、思想・信仰などの分野での浸透は必ずしも先行的とは認め難い。ただこの種の分野に関

しては、現存資料が相対的に豊富なゆえにか、研究だけが先行して成果の蓄積が多いようにみられる。なお、技術面での浸透は軍事・経済のそれと並行するとみられるものの、意外にも未解明なところが多い。

C. 地表空間が文明で飽和に達して後は、異文明間つまり複数文明圏の接触・交錯する地帯こそフロンティア発生の場となり、新文明爆発の可能性が少なくない。

とはいうものの、複数文明圏の接触・交錯する地帯は、まさに広義の破碎帯にほかならない。それゆえ軍事的、政治的、経済的ばかりか思想・信仰面さえも、長期にわたる対立・抗争が展開されやすいのが一般的である。この種の対立・抗争が産業社会への移行前に解消され、今日では一応の安定化を示し漸移帯と見做されている諸国であっても、時折り休火山爆発のような国内抗争が例外ではない。

したがってこの種の破碎帯的な接触・交錯地帯の場合は、大別して次の3種の動向が指摘できる。

まず第1は、長期におよぶ対立・抗争を反復した後に、ようやく一応の安定化を招来した結果、今日では漸移帯的な状況を呈していると容認される地帯である。つまり、過去において長期間、破碎帯的傾向を展開したものの、相互に質的差異を肯定しつつ安定化を持続する事例と認められる。たとえば、西欧におけるカトリック(公教)・プロテスタント(新教)両信仰圏の漸移帯は、この種の代表的事例としてよい。国内の事例としては、わが国の東・西両日本の接触・交錯する中部地方の西半分などがこれに類すると想定できよう。したがってこの種の地帯が新段階の中核となることは、きわめて例外といわざるを得ない。

第2の方向は、これも過去における破碎帯ではあるが、長年月にわたる抗争の後に一方の文明圏が拡大、しかもまさにフロンティアの発生さえあったにもかかわらず、新文明爆発には至らなかった場合である。対抗勢力の追放などあまりにも所属する文明の純粋化を求めすぎた結

果か、一時期の繁栄の後には、停滞がちな後進的性格が持続する傾向も著しい。たとえば過去においてイスラム・ラテン両文明圏が接触・交錯、長年月におよぶ「国土回復」運動完了とともに「大航海」時代の先駆となったイベリア半島こそ、この好事例というべきであろう。

第3としてあげられるのは、数百年ないし一千年余にわたって破碎帯の様相が継続的な地帯であって、しかも今日においても同様な様相を呈している場合である。ユーラシアの西部では、ゲルマン・ロシアの两大民族の狭間で生存を余儀なくされて来たバルト沿海や東欧の諸民族、対立的な複数の有力国の動向に左右されがちなバルカン半島諸国などが、その好事例と認められる。

一方、ユーラシアの東部にあっても、大陸的な二大勢力と海洋勢力との間に介在する朝鮮半島の場合は「脱圏」<sup>19)</sup>の可能性を模索するとしても、なお破碎帯的条件は明白であり、漢・ヒンズー両文明圏の接触・交錯する東南アジアもまた、19世紀以降は別の外部複数勢力の干渉的とされ、その様相は今日もなお持続的というわけである。

ここで検討を加えたように、フロンティア理論の場合も、それを無修正のまま地域変容解明の手法とするには、いささか問題を残すとせざるを得ない。だが上述したAの観点が、地域変容の要因究明のために活用すべき妥当な手法の一つであることは否定し難い。また変容の過程追究にあたっては、同じくBのそれが示唆するところに注目を要するとしてよからう。

というのは、これまでも空間組織や空間構造などについては多くの蓄積がなされてきたが、空間規模とその変動に関する限り、ほとんど等閑視されがちではなかったかと、自己を含めて批判の余地があることも否定できないからである。

Cの提言については、ここでも検討を加えたように、少なくとも複数の地域的類型が認められることは明らかである。したがって、今日にあってもなお破碎的性格の著しい対象について

は、さらにより多面的な追究こそ要請される。この種の事例もまた、地域変容解明のための主要対象に含めざるを得ないからである。そればかりか、今日の様相解明によって把握した結果からも、過去の破碎帯に関する諸問題究明への示唆を受ける可能性が多いと推測できるからでもある。

多くの場合、地域変容の要因および変容過程の究明にあたって障害の筆頭にあげられるのは、過去に関する資料現存度からの制約であろう。あるいは共通の対象に関する既往の諸研究についての疑問点もあろう。それらに対しても、今日の様相の解明により得られた結果こそ、作業仮説の補正により多くの示唆を提供するとしてよい。

なお付言すると、破碎帯(crush zone, shutter belt, political rift valley, tension area等々)なる概念は、本来、政治地理学分野からのものである。だが最近では、文化地理学分野にあって、文化圏の接触・交錯地帯について破碎帯あるいは漸移帯などの用語を与える事例がみられる。

政治地理学が提示する破碎帯なる概念は、対立的な複数の大勢力(超大国・大国)の狭間に存立する小国または弱小国家群を意味し、これら複数の大勢力による軍事的、政治的、経済的等々の干渉や圧迫を受けがちで、国内的にも国際的にも政情不安定が慢性化しやすく、国際紛争が多発・反復しやすい地帯とされている。その形成要因としては、帝国主義体制下において超大国・大国の勢力圏拡大志向から招来する勢力圏の接触・交錯が主因としてあげられ、それとともにこの種の外部勢力浸透に対する弱小諸国の対応如何が指摘されている。したがって要約すると、外的・内的の両因に大別できよう。

いかなる国家も、まず自国の安全保障こそ基本政略とするのは当然である。しかし超大国や大国はさらに自己の領域外にまでも、その防衛前線の確保・拡大化を志向する傾向が著しい。そのためには近隣各国ばかりか遠隔の地にある国々さえも、自己の勢力圏に編入・確保するこ

とを主要政略とするのは共通的としてよい。ことに超大国などの場合、自己の社会体制・価値体系こそ絶対的なものとして、対抗する別個の超大国のそれらを否定、自己の勢力圏に属する各国に対しても、自国の体制・体系の受容・順応を強要しがちである。そのためか時には「中立」さえも悪と主張したこともある。

さらに対立的な他勢力圏内の弱小諸国などに対し、それらの国内的な不安定化を計画、さまざまな工作を試みることも多く、その混乱の長期化を期待し、時に応じてそれら小国をも自己の勢力圏への編入をと意図するのが一般的と認め得る。このような複数の外部勢力からの作用こそ、外的要因の中軸としてよい。

一方、破碎帯各国は一般に、その国民の民族構成が複雑、社会階級も対立的なためか、一国の命運を左右する指導的勢力なども見掛けだけにすぎない。一応は指導的と目される階層でさえ、国外の大勢力との連繋のみに腐心しがちで、一般大衆への配慮などは論外という傾向が著しい。そのため自国の大衆さえも国外の大勢力へのイケニエに供して来たのも、また一般的としてよい。この種の指導層に対する反発から、国内の被圧迫民族や階層、軍人・学生、時には宗教集団等々が従来とは異なる別個の国外勢力へ接近しがちであって、このようにして国内政情の不安定が展開する事例が少なくない。ことに超大国・大国からの物質的援助や心理的工作などによってこの種の政情不安定が慢性化する傾向が著しく、第二次世界大戦終結から40年余をすぎた今日でも、世界のどこかで戦火が継続していることは否定できない。これらが内部的要因ということになる。

このように概観した今日の様相だけからしても、いわゆる文化圏の漸移帯ないし破碎帯の究明には、文化的分野からのそればかりではなく、軍事的、政治的、経済的等々の諸分野からの追究が要請されることになる。また、段階的移行と中心地域の移動の並行関係に関しても、生産様式の新旧だけに限定した追究ばかりではなく、同様に多角的な究明こそ期待されるとしてよい。

さらには、国際関係からみた破碎帯に対する解明もまた、より多面的な考察を要するわけであって、地域変容の究明に関する手法もいささか多彩と認めざるを得ない。

#### IV. 破碎帯の形成要因

破碎帯の形成・出現を、いわゆる帝国主義体制以降とみる見解には、数々の疑問が続出する。この種の見解は、世界的主導権獲得をめざす側からのそれであり、巨大勢力対立の狭間におかれる側からすれば、このような単純化など到底認め難いとしてよい。つまり、この種の見解なるものは、まさに中心をなす側の視座からであって、辺縁の側からの観点はまったく論外としているものとしてよい。

だが国際的不安定さを特性とする地帯の大半は、ともに数百年または一千年以上もの長期間、その特性を継続的に保持して来たものと認められ、時には休火山爆発のごとく、その存在が注目されて来た地帯でもある。もちろん植民地争奪が具体化するに至った結果、その特性が顕在化した事例が皆無とはいえないし、第二次世界大戦以降、破碎帯の性格を示すに至った事例さえ指摘できる。だが文化圏の漸移帯ないし破碎帯と見做される地帯ではいずれも、この種の特性が長期間にわたり継続して来たものと認めざるを得ない。それは軍事的、政治的、経済的等の側面に限らず、宗教的、文化的、社会的ないし民族的などの側面からしても、その共通の特性が明らかに把握されるがゆえである。

そこで、これまで追究し得た破碎帯に関する共通の特性ないし形成要因ともみるべきものをあげるならば、大略、次に列挙するとおりである。

##### A 大生態系漸移帯を占める立地

生態学分野では、気候＝植生系をもとに大生態系の究明が展開されており、その区分も地球規模でなされている。しかもこの種の区分では、漸移的な地帯を混合空間(ecotone)としている。多くの事例を通じてみた場合、古くから破碎帯の性格を呈して来た地帯は、まさにこの

種の混合空間にほかならないと把握されるのである。たとえば陸橋的特色の著しい半島がそれであり、Open landとForest landとの中間的と認められる森林ステップなどもまたその代表的事例である。なお混合空間は地形的にも多様なため、その面からも地域核心の形成が困難との指摘もある。

この種の条件こそ民族分布の多様さ、民族構成の複雑さを生む要因の一つとみられ、しかも文明圏・信仰圏の辺縁部もしくは交錯帯とはほぼ合致する傾向が著しいことも否定できない。

##### B 複雑な民族構成(混住・棲み分け)

民族という社会集団を如何に定義すべきかについては、これまた各人各様ともいうのが現段階としてよい。ただし政治的主張(民族自決、民族主義、民族独立運動等)を別とすれば、当該共同体への帰属意識、宗教的信仰、言語的遺産を共有する社会集団ということにもなるか。言語の共有こそその見解もあるが、それを失っても集団的帰属意識を持続する民族もあるなど、これまた多様というほかあるまい。

破碎帯各国はいずれも、その国民の民族構成は複雑であるが、それが属する破碎帯全域もまた同様に多様であって、しかも同一民族が国境により分断されることも例外ではない。このような様相を呈する要因の一つは、この地帯が有史前から反復されて来た民族移動の主要コースないし終点になっていることであろう。産業化の前段階までの民族移動を概観すると、多くの場合、それは当該民族生成の故地と共通する大生態系の圏域内に限定されがちで、それを越えてあふれ出すかとみられてもなお、混合空間の範囲内にとどまっているとしてよい。

ユーラシアの乾燥草原を故郷とする騎馬民族による征服的大帝国もまた、森林地帯の辺縁つまり混合空間までがその進攻限界と認められる。民族生成の故地とは異なる大生態系への移動は、少数の征服民族集団がこの種の漸移帯に数世代滞留し、その間、被征服民族との混血化を進め、それらの文化要素を受容した後に、ようやく具体化した観がある。

大生態系の混合空間では、複数の大生態系から来住した諸民族のそれぞれが、移動前の故地で形成した生活様式のまま、まったく改変することなしに生活可能だという。だがしかし、来住諸民族統合の中核となり、それらを再編・組織化して新しい民族形成を展開するほどの優勢な民族は認め難い。またこの種の展開には相当の長年月を要するとみられるが、その余裕を与えないほどに外部からの征服、新来住の民族移動が繰り返されて来た。これらが複雑な民族構成を示す要因にあげられよう。

さらに民族構成を多彩にしているのは、後来の離散の民(diaspora)の定着化である。東欧・バルカン半島の場合、第二次世界大戦の結果、ユダヤ系、ドイツ系、その他この種の民族分布は激変したものの、なおトルコ、ギリシア、アルメニア系その他の国外移住をも惹起して、各国の中間階層解体となった。つまり、政治的変革は実現したものの、その後の経済発展の停滞化傾向は否定し難い。東南アジア諸国の場合は、今日でも華僑その他 diaspora の動向如何が一国経済を左右するほどである。

なお、複雑な民族構成とは、それとともに言語、信仰、知的水準、風俗習慣等々さまざまな側面が多様であることを意味し、どの面からみても国民的ないし地帯的統合がまことに乏しいということでもある。したがって当該破碎帯を代表するほどの生活様式などは形成されず、まさにパッチワーク的、モザイクの様相を呈しているという面だけが共通的特性ということにもなる。

### C 高度宗教信仰圏の接触・交錯

人類一般に妥当するような宗教に関する定義はまだ認められないとしてもよく、この分野での専門的定義なども、まさに各人各様とするほかあるまい。門外漢の眼からすれば、それは行動規準・価値体系を伴う死生観(人間観)・世界観を中軸とする観念体系ということにもなるか。無文字社会の民俗的信仰でさえこの種の各条件を具備することが否定できないからである。それにしても、民族形成過程における宗教が果

たした役割<sup>20)</sup>、高度宗教受容に伴う政治的支配理念、文字体系、芸術様式等々の導入、あるいは他からの異なる信仰強要、改宗強制がいかにより多くの人々を犠牲にして来たかなど、社会共同体の解明に際して宗教との関連を軽視することは至難事ということになる。

いわゆる高度宗教(キリスト教、イスラム教、仏教など)はいずれも民族や国境を越える信仰圏拡大をめざし、人類一般に対する普遍性を主張して来たが、それぞれの信仰圏の実態は、ある特定の生態系の枠内に限定されがちであって、それを越えるとしても混合空間の範囲にとどまるかとみられる。一般に、ひとたび受容した特定の高度宗教が、さまざまな変容を経て大衆レベルにまで浸透するには、数百年を要するのも通例としてよい。しかもこのような様相を具現した後は、次に異なる高度宗教が到来したとしても、それに対する改宗が当該民族全体に波及することはきわめて異例のことと認められる。つまり民族とそれが信仰する高度宗教との出会いは、歴史上唯一回限りというわけである。

だがしかし、破碎帯の場合は、相次ぐ高度宗教波及の度ごとに改宗もまた反復されがちであるとか、他地域にあって移動以前に受容した高度宗教をそのまま伴って来住した民族も含まれるなど、その結果、この種の信仰圏の交錯・接触さえも一般的と把握される。したがってそれぞれの信仰集団ごとの行動規範や価値体系もまた差異を示し、社会的統合さえ困難視せざるを得ない。

たとえば朝鮮半島における様相、すなわち最初は北方仏教の国教化、ついで徹底的な排仏棄却から朱子学系儒教の導入、さらに一転してキリスト教諸派への支配層を中心とする改宗の進展という過程などは、まさに破碎帯的特性の好事例としてよい。あるいは北・西欧一帯のカトリック信仰からプロテスタントへの改宗による信仰圏形成に対して、一旦は異教徒の天国とも称されたその辺縁部に対するカトリック系の反宗教改革運動の進展、ウクライナを中心とする合同教会(Greek-Catholic)信仰圏の形成、バル

カン半島におけるオーソドックス信仰圏へのカトリックおよびイスラム信仰の浸透、さらにはイベリア半島を中心とするイスラム・カトリック両信仰圏の交代など、いずれもこの種の代表的事例と認められる。

#### D 文明圏の接触・交錯

文化が系譜や素材の由来に関する問題か否かはさておき、文明は構造や機能が主題であって、それは歴史的に形成されて来た基本的デザインのもとに統合されているとの見解<sup>21)</sup>はおおむね首肯できる。つまり文明とはそれぞれに独自の価値体系、芸術様式、世界観その他を共有する社会共同体のことであり、その存続のためには、特定の地表空間占有を不可欠とする指摘も、しごく当然のこととしてよい。これこそ文明圏の実態ということになる。したがって個々の文化要素・文明要素だけを指標とする圏域設定という立場などは、根底からの批判を甘受せざるを得ないわけでもある。

しかし破碎帯にあっては、代表的生活様式の欠如こそ共通特性であり、その地帯を統合する基本的デザインもまた皆無に近い。このような様相が持続的と認められる背景としては、この種の地帯がある特定文明の圏域辺縁を占めるということもあろうが、それは複数の文明圏の接触・交錯の場を占めるがゆえに、相互の文明核心からの波動を受けざるを得ないことがあげられる。その結果、長期間にわたって不安定状態が持続的であるとか、あるいは仮りに統合への可能性があったにしても、それへの過程で異なる波動を幾度も甘受せざるを得なかったからとみるべきであろう。

以上に検討を加えたほかにも、破碎帯に共通的として指摘し得るものが少なからずあげられる。たとえば都市網が未熟なまま域間交流は相対的に乏しく、首都と地方との間に著しい断絶がある。首都ないし植民都市だけの異常なまでの人口肥大、中間層の欠如または未熟を補完する離散の民の動向その他、今日的な共有的特性もまことに多彩である。

先にも言及したが、過去においてこの種の特

性が顕著と認められる事例のなかには、段階的移行の発端となった地帯が含まれることが注目されよう。たとえば、いわゆる大航海時代開幕の先駆をなしたイベリア半島がそれで、この半島こそ地中海文明圏またはカトリック文明圏とイスラム文明圏とが接触・交錯した破碎帯としての歴史を有する。しかもカトリック教徒の国土回復運動の過程にあって、イスラム文明の文明要素を着実に受容し近代西欧文明誕生へ大きく寄与したにもかかわらず、その本格的核心とはなり得なかったわけである。したがって、段階的移行に伴う地域変容の解明にあたっては、破碎帯に関する考察からの示唆を受けることができよう。

#### むすびにかえて

これまでの追究を要約すれば、おおむね次にあげるとおりになろう。

A. 民族、宗教、文化、文明等々の基本概念に関する定義は、各々の専門分野においてさえ、通説とみるべきものがなお未形成とせざるを得ない段階にある。ただし、そのいずれもが体系（システム）または複合とみるべき性格を有するとみる点だけは、ほぼ共通的と認められる。したがって、少数の特定指標を採用し、それらだけの分布から圏域設定を進めるためには、採用した指標がいかなる体系・複合を代表するかについて厳密な検証を加えることが不可欠というわけである。

B. 段階的移行なるものは、まさに地域変容の一つとみることが許容されるとしてよい。それに関する見解のいずれもが、中心と周辺ないし辺境と地表空間的関連をその視野に入れている。ただしこの種の空間関係をいかなる基準のもとに区分するかについては、諸見解いずれもがまことに不明であることも否定できない。したがってこれらに関しては、われわれの視座からの究明こそ要請されよう。

C. 隣接諸分野からの考察は、多くの場合、対象の中核部ないし上部構造的なるものへの追究に重点がおかれ、その辺縁もしくは下部構造

などへの関心は相対的に乏しいと把握される。それゆえか、圏の様相や圏域変動への言及も第二義的にとどまっている。しかしながら段階的移行の進展も新文明の生成・展開も、中心地域からではなく、いずれも辺縁部からと認めざるを得ないわけである。つまり、異なる圏域の接触・交錯の場こそ、その可能性を大きく有するものとみるべきであって、破碎帯の性格の著しい対象の解明からは、地域変容の要因やその過程追究への示唆を受けることが多いということになる。

なお、地域変容なる諸事象は、ここで言及した規模のものに限定されるわけではない。たとえば一地方、さらには一府県ないし町村単元を対象とした場合でも、それぞれに究明を要するわけであって、それには域間交流のありようなどの動態的解明などが、この種の課題究明にも大きく寄与することを付言しておこう。

〔注〕

- 1) 石川栄吉他編『文化人類学辞典』弘文堂, 1987, pp. 666~667.
- 2) 前掲1) pp. 663~669.
- 3) 前掲1) pp. 676~678.
- 4) 米山俊直「梅棹文明学をめぐって」(梅棹忠夫『日本とは何か』日本放送出版協会, 1986) pp. 225~226.
- 5) 異文化に接しそれへの同化に努力しても、その社会では異質的とされ、他方、自己の社会からも同様に異端視される人々のこと。
- 6) 日本地誌研究所編『地理学辞典』二宮書店, 1973, p. 658 および pp. 659~650.
- 7) 梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社, 1967.
- 8) A. J. Toynbee 'A Study of History XI'. 下島連訳「歴史地図」(歴史の研究, 第24巻) 経済往来社, 1962.
- 9) 江上波夫・伊東俊太郎『文明移転』中央公論社, 1984.
- 10) 柳田邦男『変化の読み方』ネコス, 1985, pp. 66~72.
- 11) 馬野周二『アメリカ落日の論理』ダイヤモンド社, 1981, pp. 136~145.
- 12) 大塚久雄「緒言」(『岩波西洋経済史講座 I』岩波書店, 1960) pp. 12~18.
- 13) 名和統一「現代資本主義をどう捉えるか」(世界, 144号, 岩波書店, pp. 58~59) に紹介のコンフォースの見解.
- 14) M. ブロック著 新村他訳『封建社会』訳書2, みすず書房, 1977, p. 156
- 15) 増田四郎『ヨーロッパとは何か』岩波書店, 1967, p. 46 および pp. 189~190.
- 16) 三木 亘「世界史のなかのイスラム世界」(『イスラム世界の人びと1』東洋経済新報社, 1984) pp. 21~27 および pp. 56~60.
- 17) 前掲1) pp. 674~675.
- 18) 矢野 暢『東南アジア世界の論理』中央公論社, 1980, pp. 82~130.
- 19) 玉城 素「現代朝鮮の文明史的位相(中央公論, 1980年4月号, pp. 296~299) に紹介の李用熙の見解.
- 20) C. ドーソン著 野口啓祐訳『中世のキリスト教と文化』新泉社, 1969, p. 22.
- 21) 前掲4) pp. 222~224.

## THE CIVILIZATION REGION AND THE CRUSH ZONE

Chiharu KUROSAKI

Emphasis is placed on the historical analysis for development of geographical phenomena, including occurrence, adolescence, decadence and disappearance, in the field of social and cultural geography today. In this paper, the author tried to analyze the basic structure of civilization development on a world-wide scale from the view-point of social and human science, especially of geography and cultural anthropology, paying his attention to the role of crush zone.

The civilization region is consisted of three zones, the core, the environs, and the frontier, which change their characters gradationally. The most important zone has been the frontier, namely, crush zone, where the new civilization originated frequently. In the frontier zone, where two civilizations is bound each other, the author points out the three trends. They are (1) stability after a long conflict, (2) conquest or exile of a civilization by the other, and (3) continuous conflict between two civilizations over centuries. The last category often becomes a strong reason on occurrence of crush zone. The crush zone was formed in the transitional zone of ecology system and the zone of complicated mixture of defferent races or religions on a world-wide scale.

The analysis of crush zone on a world-wide scale is very important for the dynamic study of regional formation in the view-point of historical geography.